

想定を超える大津波



熊川地区の沿岸部に迫り来る津波。水平線のように見えるのは津波の壁



東京電力福島第一原発を襲う津波(東京電力ホールディングス提供)



津波に襲われ、変わり果てた熊川地区一帯

想定を超える大津波

【クローズアップ大熊町①】

平成23年3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生した。

震央の南西約180kmに位置する福島県大熊町でも地面が波打ち、割れ、液状化によりマンホールが飛び出した。町役場庁舎2階では、防災を担当する生活環境課の男性職員が、テレビを押さえつつ、同課に設置されている震度計の数値を大声で読み上げた。「6強!」。揺れが収まるとすぐ、支えていたテレビが伝えた警報を読み上げた。「大津波警報出ました!」

同課職員4人は避難を呼びかけるため、広報車2台に分乗し、浸水が懸念された熊川地区に急行。「大津波警報が…発表されました…」防災無線からはゆったりとしたトーンのジェイアラートの自動放送が流れている。その間を縫うように、庁舎に残った同課職員が海岸や河口に近づかないよう、また熊川地区住民は指定避難所の集会所に避難するよう呼びかけた。午後3時、町は役場2階ロビーに町長を本部長とする災害対策本部を設置。建設課職員は道路や建物の被害状況確認のため、広報を担当する企画調整課職員も記録のために庁舎を飛び出した。

津波の第一波が町に到達したのは午後3時27分ごろ、同36分ごろには第二波に見舞われた。町に立地する東京電力福島第一原子力発電所の推計では波高は13m。それまで「3m」「6m」と予想される津波の高さを更新していた気象庁が、その予想を午後3時半に「10m以上」とした時にはすでに第一波は町沿岸に到達していた。町の防災計画で想定していた波高は5.3m。津波は浸水を免れるはずだった避難所の集会所をのみ込んだ。金曜日の日中で、避難者には高齢者が多かった。職員や地元消防団、区長らの誘導で、集会所にいた十数人は助かった。しかし、浸水域は沿岸部約2kmにわたり、津波により町民11人、地震の揺れにより1人が犠牲になっていたことがその後、判明する。

この間、災害対策本部は企画調整課を中心に福島第一原発の状況確認に努めていた。同課長の机上にある福島第一原発との直通電話は地震後、不通になっていた。同課が福島第一原発の「緊急停止」と「火災なし」を確認したのは午後3時35分ごろ、隣の富岡町と楡葉町に立地する福島第二原子力発電所を通じてだった。そのころから災害対策本部には、職員たちから町内各地の被災状況や安否情報もたらされ始めていた。両原発の停止が確認され、本部は津波・地震対応に一層集中した。

余震が続く中、まもなく日が落ちると、停電が続く町内での復旧・救助活動には二次災害が懸念された。本部は再度津波が押し寄せることを考え、町を縦断する国道6号から東側の住民を町総合スポーツセンターへ避難誘導。道路などの被災状況を地図上に集約して翌朝からの本格的な活動に備え、職員たちは避難所運営に尽力した。課長級の職員も食料や水、発電機や照明などの調達に走り、スポーツセンターでは未明からおにぎり作りが始まった。懐中電灯の光の下、徹夜の炊き出し。職員の一人は自分を励ますように、同僚たちに声をかけた。「がんばろう。この一晩を乗り切ろう」



上:被害の報告に息をのむ渡辺町長ら町幹部(福島民友新聞社提供) 下:避難指示で町総合スポーツセンターの体育館に集まった町民